

ニセアカシアのべっこうたけ病

秋 本 正 信

当該構内の池のほとりには、胸高直径 26～48cm，樹高 12～15m のニセアカシアが 14 本あるが、51 年夏これらの一部にベッコウタケが生じているのに気づいた。今年も同じ木にベッコウタケが生じたので 2，3 観察を行った。

ニセアカシアの位置は図 - 1 に示した。ベッコウタケに侵されたニセアカシアは 14 本のうち 6 本とかなり多く、被害本数率は 43% であった。

6 月初め、樹幹基部の樹皮の割れ目から指先大の淡黄色のきのこが現われた。これはしだいに大きさを増して 7 月には直径 5 cm ぐらいの半球形こぶ状となり、鮮やかな卵黄色を示すためかなり離れたところからでも目につきやすい。その後あめ色に色づきはじめるとともに上面がせり出してきて扁平となり、いわゆる「さるのこしかけ」の形となった。これらは地際から地上 55cm の範囲に、被害木 1 本当たり 5～20 個重なりあって生じた（写真 - 1）。



写真 - 1 ニセアカシアに生じたベッコウタケ。
矢印は前年に生じたもの。

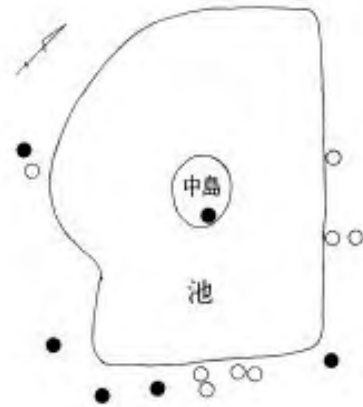


図 - 1 ベッコウタケによるニセアカシア腐朽木の位置図
黒丸：腐朽木，白丸：健全木

重なりあって生じるため 2，3 個融合することがあり、形もさまざまであるが、普通は半円形で基部がやや厚く先端にむかって薄くなっている。成熟したものはコルク質で堅く、上面は暗赤かっ色でわずかに年輪状の濃淡があり、周縁部は特に色がうすい。下面の管孔部は汚灰白色である。8 月中旬、きのこの直下にスライドグラスを一昼夜置いたところ、落下した胞子のためうっすらと白くなった。この胞子は大きさ 5～6 ミクロン、無色準球形で小さな突起がある（図 - 2）。なお、ベッコウタケは 1 年生のさるのこしかけであるため、昨年生じたものは、春先の観察時にはすでに枯死し、黒かっ色となって脱落しかかっていた。

なお、付近に地上約 1 m で切断されたニセアカシアの伐根があり、ベッコウタケが多数生じていたので、この

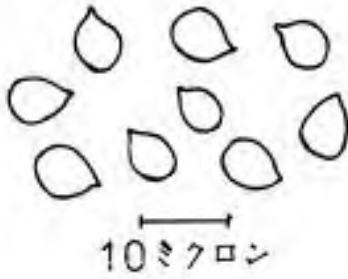


図 - 2 ベッコウタケの孢子

伐根をきのこの着生位置地上 80cm 付近で新たに切断し、断面の腐朽状態を調べた。腐朽は心材部を中心に辺材部にまで及び、腐朽面積は断面の 57%であった。腐朽型は海綿状白色腐朽と呼ばれるもので、主としてリグニンが分解されるため、腐朽部は白色となり、指で押すと容易にくぼんだ(写真 - 2)。

この木が伐倒された原因は明らかでないが、根が切れて浮き上り、樹幹がかなり斜めに傾いているところから、風害木であったと思われる。一般に腐朽菌に侵されると材がもろくなるため、強風によって幹折れや根返りなどの被害を受けやすい。このことから、ベッコウタケによる根株部の腐朽が風害を誘発したとも考えられる。なお、伐倒木の樹齢は 40 数年であった。

ベッコウタケは多くの広葉樹に生じる根株心材腐朽菌であるが、ニセアカシア、サクラ類に最もふつうにみられる。腐朽は根部と樹幹基部で特に著しく、入口は枯死した根あるいは樹幹基部の傷と考えられている。また、根を枯死させる最も重要な原因は、土壌中における一時的あるいは季節的な滞水であるといわれている。腐朽させるところは、おもに心材であるが、ときに辺材、樹皮をも侵して樹勢をそぎ、ついにはこれを枯死させることもある。

今回観察したニセアカシアには、ベッコウタケの侵害が多くみられたが、池のほとりに位置すること、すぐそばに小川が流れていることなど、過湿による根腐れが起りやすく、これがベッコウタケの侵入の機会を多くしたものと考えられる。もっとも、根がほとんど池の水につかるような位置にあるものでもベッコウタケが生じていないこと、樹幹基部の傷から侵入したと思われる例もみられることなど、被害の原因は必ずしも一様ではない。

ベッコウタケのような根株心材腐朽菌の場合、腐朽の初期にはきのこが現われず、きのこが生じたときには、すでにかなり腐朽が進んでいる。これらの腐朽菌は樹幹部を取り除いても、依然として腐朽根部に生きているため、根絶することはむずかしい。このため、予防法としては、地際に大きな傷をつくらぬよう配慮するのはもちろん、植栽地の土壌条件を十分考慮し過湿になりやすい場所では排水を良くするしか方法がない。これらの対策は実際にはとりにくいことが多いが、残念ながら現在のところ、このような方法しか見当たらないのが実情である。

(樹 病 科)

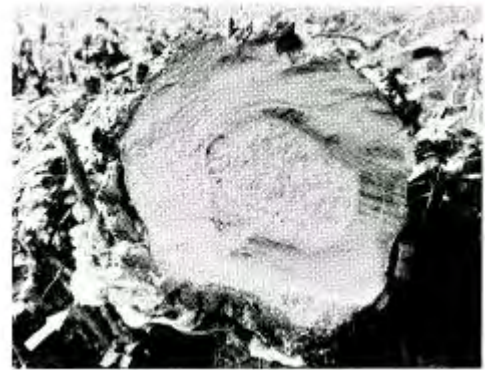


写真 - 2 ベッコウタケによるニセアカシアの腐朽状況。矢印はベッコウタケ。